

(1)学校経営の改革方針における今年度の重点取組についての評価結果

項目	行動計画の目標・評価方法	達成状況・評価結果	具体的取組に関する成果や課題
学習指導	<p>(1)基礎学力の向上と上級学校に円滑に接続できる確かな学力の定着を図るため、授業力の向上に努めます。</p> <p>(2)家庭学習定着支援課題(週課題)に継続して取り組みます。</p> <p>(3)生徒一人ひとりの学習状況を把握し、時期を逸することなく「課題・補習・面談」を実施するよう努めます。</p>	<p>(1)授業改善の方策として、これまで行われてきた「授業交流」を継続して実施したほか、新たに生徒対象の「授業アンケート」を実施しました。このことにより、教員は新たな観点により、自らの授業を振り返り、その改善に資することができたと考えます。</p> <p>(2)例年通り英語、国語、数学の3教科について、各学期約10回程度実施することができました。課題の取り組み状況について昨年度よりも厳正に点検している中で、提出率は90%以上(2学期末現在で95.4%)を維持しています。</p> <p>(3)「学習実態調査」を6回実施し、生徒の学習状況を把握し、その結果を元に生徒一人ひとりに対して適切で有効な指導ができるように、その資料を担任に提供することができました。</p>	<p>(1)第1回(6月)「授業アンケート」より第2回(11月)の方が、いずれの質問項目に関してもポイントは上昇しており、一定の改善があったものと思われます。生徒の自己評価として「予習・復習・宿題に対する取り組み」について、他よりも評価が低いこと、授業に対する評価として「授業の目標の明確化」がやや低くなっていることなど課題であるといえることができます。</p> <p>(2)この取り組みが、本校の学習指導の一つの柱として定着している状況にあり、これにより基礎学力の養成、家庭学習習慣の定着という、この取り組みの目的において、一定の成果を上げているといえることができます。今後は、この取り組みが形骸化することなく、教育環境の変化に応じて、柔軟に対応できるように実施状況について注視していくことが必要だと思われます。</p> <p>(3)生徒自身にそれぞれの学習目標を設定させ、それがどの程度実現できたかを調査して振り返ると共に、それを面談の資料とすることができました。また生徒の学習動機に関する調査などにより、より効果的な学習指導についての検討をいたしました。学習時間や学習方法と、学習成果の相関、本校生徒の相対的な学習状況の把握方法について、検討の余地があると考えます。</p>

進路指導

(1) 学年集会、進路ガイダンス、系統的な面談（二者・三者）等を活用し、生徒のキャリアプランの形成を支援します。

(2) 面談を軸としてガイダンス機能を充実させ、適切な進路選択と決定に向けて支援します。

(3) 考査や模擬試験の結果を用いたガイダンスを効果的に実施することで、生徒の進路希望が適切に設定できるよう支援します。

(1) 従来から行っている“進路ガイダンス”（第3学年）や“分野別説明会”（第2学年）、“高大連携模擬授業”（第2学年）や“キャリア・ガイダンス～職業理解～”（第1学年）に加え、“京都大学高大連携模擬”（第1学年）、同窓会のご協力による“ようこそ先輩～OBと語る会～”（第1学年、昨年度に引き続きの事業）、“卒業生と語る会”（第2学年、復活事業）で、将来に対して考える契機としました。“キャリア・ガイダンス～職業理解～”（第1学年）では、大学研究家の山内太地氏をお招きし、進路選択に向けて前向きな気持ちを奮い起こさせる講演をいただき、大変好評でした。

(2) 担任との面談を充実させ進路希望状況の把握をおこなうことで、個々の生徒の進路希望状況を進路検討会などで共有化を図ることができ、進路実現の支援の一助となりつつあります。

(3) 職員向けにはスタディーサポート研修会、進路検討会、職員進路研修会を、生徒向けには第1学年・第2学年それぞれにおいて、模擬試験に対する講演を数回実施し、学習支援を行いました。

(1) 生徒の反応は事業実施時には良いものが感じられますが、事前指導や事後指導が不十分などところがあり、単発的な企画になってしまっている。事業を活かした生徒意識の昂揚の工夫が必要であると考えます。

(2) 進路希望実現度は、指定校制推薦入試（第一志望校受験）での合格者が例年より多いことから、概ね第一志望校を実現させているのではないかと思われまます。面談の充実化が、進路検討会などでの情報共有や支援に結びつきました。

(3) 単発的な企画があるので、継続的・効果的な事業展開ができる工夫を検討します。また、毎週設定された教科会で、幾つかの模擬試験の問題検討と成績分析を実施し、振り返り学習や学習支援の体制を構築していくことが求められます。模擬試験の問題検討と成績分析の方法については今後各教科会で検討するも、全校的に効果の上がる取り組みを組織的に行う必要があると考えます。

生徒指導	<p>(1) 挨拶運動の活性化を通してあいさつの輪が広がる取り組みをします。クラブ員、生徒会役員を中心に月例で「朝のあいさつ運動」を行い、年間の参加延べ人数300名以上を目指します。</p> <p>(2) 6月・11月を重点指導月として遅刻の多い生徒に面談を軸とした丁寧な指導を行い、過去3年間の同月平均数値の5%減を目指します。</p>	<p>(1) 4月～1月までの間、新入生歓迎期と月例で行いました。男女別有志14クラブと生徒会で延べ人数980名の参加でした。学校生活に関するアンケート調査結果では「生徒は自分から先に挨拶する習慣が身についている」と回答した教員が、昨年度38%から今年度79%に増加しています。</p> <p>(2) 6月は各学年の生活にも慣れた疲れの出る月、11月は学校行事も終わり中だるみの月として毎年遅刻の多い月でした。重点的にこの2か月、手続きの際など遅刻生徒に声掛けなどを行いました。6月は平均145が今年度96(33%減) 11月は平均189が今年度115(39%減)となりました。</p>	<p>(1) 挨拶が日常的、積極的にできる生徒が確実に増加しました。毎年学校生活の慣れとともに挨拶が聞かれなくなっていますが、今年は落ち込みもあまり感じませんでした。このような現象に伴い、学校が明るくなったり、意志疎通がしやすくなるなど目に見えない波及効果も多方面にわたります。今後は、プラス面をどう具体的に発展させるか、有志クラブ、生徒会からの広がりをどうするかが課題といえます。</p> <p>(2) 今年度12月までの全体遅刻数は3年間平均の同月まで比16%減で、安定した日常生活が送れています。6月11月の減少幅はその年間の平均減少幅より大きく、声掛けの効果もあったと考えられます。寒い季節になると遅い電車に乗ってくるなど今までより余裕のない生活になっている生徒も増えているので、それぞれに合った朝の時間の活用を考えさせることも課題です。</p>

(2) 組織の状態の評価結果

アセスメントから明らかになった状況	
強み	<ul style="list-style-type: none"> ○職場の雰囲気は明るく自由闊達な雰囲気がある。 ○生徒や保護者の要望や期待、満足度を具体的に把握し、その情報は生徒や保護者に積極的に発信している。 ○学習指導面において「やりがい」や「楽しみ」を感じている教員が大多数を占めており、所属する分掌や学年には、互いに協力する雰囲気がある。 ○学校と地域や関係機関との連携は良好であり、学校の情報を積極的に発信している。
弱み	<ul style="list-style-type: none"> ○「学校経営の改革方針」等の計画を策定する際にすべての教職員を巻き込み、理解と納得を得る必要がある。 ○意欲的な取組を行っている教職員やグループの活動を学校全体で盛り上げる必要がある。 ○分掌・学年内で公平に仕事配分する必要がある。

(3) 学校関係者評価委員会の実施状況

学校関係者評価委員会の実施内容等	
<実施回数>	3 回
実施内容	第1回：学校関係者評価の概要、学校経営の改革方針、入学者選抜志願者動向等の説明を行った。 第2回：学校評価報告書について教務・進路指導・生徒指導部主任からの説明、生徒・保護者アンケート結果および学校関係者評価策定に係る内容等の説明を行った。また、生徒会代表者（5名）と委員が懇談をした。 第3回：評価委員による学校関係者評価の策定を行った。 その他：学校諸行事（公開授業、文化祭、陸上記録会、講演会等）への出席依頼を行った。

(4) 学校関係者による評価結果

学校関係者評価から明らかになった改善課題	
関係者評価	○学習指導において、授業力の向上について「授業交流」「生徒を対象としたアンケート」を実施し、改善に努めていることは評価できます。また、1、2年次の週課題の取り組みにより学習習慣の定着は高く評価できます。さらに3年次の自学自習に結びついたという検証があると良いと思います。 ○進路指導において、状況に応じて教員が親身に進路相談を行い、きめ細かく行き届いた指導を行っていることは評価できます。また、「OBと語る会」「卒業生と語る会」「生徒の学習意欲向上・勤労観育成のための講演」「職員研修」等の取り組みは高く評価できます。 ○生徒指導において、遅刻件数の減少に向けて声掛け等の取り組みにより目標を達成できたことは評価できます。また、生徒会・有志クラブによる挨拶運動の結果、自主的に挨拶する生徒が増加したことは高く評価できます。

(5) 組織力向上のための取組(改善策)

次年度に向けた取組
○各学年、分掌が年度末にまとめた「今年度の総括」と「次年度の重点方策」をもとに全校態勢で新年度の改革方針を策定し、共有化する。 ○個々の取組についてねらいを明確にし、成果を効果的に把握する方法を検討し、全校的に共有する仕組みづくりをする。 ○各学年、分掌間の意思疎通の強化を図ることで組織としての機能を高め、それぞれの成功事例を共有し、学校全体として統一的な指導体制の強化を図る。 ○生徒の学力向上と大学への効果的な接続を果たすためには、確かな学力の前提となる、主体的に学ぶ姿勢、学ぶ意欲を涵養することが重要である。そのために「総合的な学習の時間」の指導プランの見直しを中心に、本校のキャリア教育体制を再構築し、全校態勢で取り組む。 ○学校組織における教科会議の機能を高めることで、授業の充実等、効果的な学習支援体制の構築を図り、生徒の学力向上につなげる。 ○組織体制を見直し、それぞれの業務分担の在り方を精査するとともに、対話を重視しチーム力を高めることを念頭に置いた組織運営をお互いが心掛けることで、年休等を取得しやすい雰囲気づくりに努めるなど、総勤務時間の縮減に向けた取り組みを進める。